ミシマ社　藤原辰史/伊原康隆対談 Manabu-toha No 24/伊原康隆の補足

先月の私の書簡に対して数人の方々から有難いご感想をいただきました。私の説明不足で、意図した主旨とは異なるところにも反応を引き起こしてしまったようです。そのいくつかについて弁明をさせていただきたいと思います（番号は伊原の９月号による）。

１　ジェイン・オースティンの「高慢と偏見』より学ぶ

この主旨は、翻訳例**を通して**「日本語の普通の表現に**何が**欠けているか」を知ろうというのでしたが、「翻訳ではニュアンスは伝わらない」という意味にお取りになった方々からのコメントは、「そういう例はいくらでもある、逆に日本語のこういうニュアンスは英語にはうまく訳せないだろう」にとどまっていたのは残念でした。「日本語は英語に比べて劣っているわけではないぞ」というのもありました。一括して優劣を論じたのではなかったのですが。

読者諸氏、それぞれで敏感にお感じになる用語とそうでないのがありますから仕方ありませんね。でも表現のアクセントの置き方にもっと工夫が必要だった、と大変参考になりました。

２　アーティキュレーション；ことばの関節

「アーティキュレーション」がわかりづらい、というご意見もいただきました。たしかにこれは英語であり、私も音楽用語としてしか知らなかったのですが、これは

「関節」「クッキリ区切った喋り方」「思想を表現できる、はっきりものが言えること」

の三方向の意味から**共通要素を（感じ取り、抽出し）一つに統合した語**、ということに感銘を受け、「言葉の関節」と比喩してみたのですが（そこに驚いてほしかった）。

３　普遍な基本用語であってほしい形容詞の一つ「理性的」

この中で「背骨の正常な状態」と書きましたが、それに対して「『正常な』と書くと、生まれつき背骨に異常がある方々への差別とみる読者も。。。」とのご注意も承りました。これも有難いご注意ですが、私自身は（家族の事情で）イギリスの片田舎の中学の寄宿舎で一年半過ごし、敵国の敗戦国からの少年として差別を受けて来なかったわけではなく、差別に無頓著な人間とは思っていただきたくありません。男子中学の寄宿舎ですよ、悪気はなくても本音が隠せる場ではありません。そしていかなる発言や表情でもっとも傷つけられるかについても、考えるところが多々ありました。しかし一般用語のこういう使用制限には、以下述べるように賛同しかねるのです。

手近な辞書には「正常」とは「普通。異常でない」としか書かれていませんから、「正

常」は基本用語の一つとして意味を共有されている言葉 ──願わくは現代でも ──でしょう。私は「議論っぽい議論を書くのは、数学だけで十分」という気分になりがちですので、ここは揶揄的に表現させていただきます ──ゆとりで受け止めていただくことを期待するしかありません。

　今後の辞書の「正常」の項はこう書いてほしい。

[正常] 普通。異常でない。
１）　２）などの他意のない「正常」
２）（注意！）ある種の施設長や政治家が使えば、例外を差別する用語にもなりうる。

同様に
[〇〇]（健康、調和感、等々）の小項目は
１）他意のない「〇〇」
２）（注意！）ヒットラーが他民族に対する優越性を、〇〇的にもはっきりさせたいという意図で用いたことがあり、その負の残像は歴史の教訓として貴重である。

　私が使うのは１）の意味です。それにしても、楽に使える用語を「狭く狭く」させる方向への圧力がここまで強いとは！　繰り返しになりますが私は、広く広く、そして基本用語の保持と共有が大切、という考えです。狭め続ける圧力が何を招くか？　「弱者」にやさしくといっても、どういうやさしさが本当のやさしさか？　個人が一般論を展開する際の基本用語において「例外」にどこまで配慮するのが妥当か？　これらを心配するのも分野によらない共通の課題だろうと思います。

　藤原さんはご書簡の最後で「型を身につけてから破れ」を援用しておられました。もとより賛成です。ただし「型」という用語のニュアンスは私にはピッタリではありません。本文（特に§４）のご説明でご理解いただきたいのですが、私にピッタリなのは「他意のない調和感」略して「調和感」でした。